

平成29年8月31日、政策秘書課職員との話です。

次世代に残すもの

あいさつの際、次の話をさせていただくことがあります。

本市は、50年ほど前までは、今のように恵まれた環境ではありませんでした。先人たちは、そうしたまちの状況に危機感を持ち、貧しいまちを何とかしようと、自分達の土地を提供し、土地区画整理事業を行い、今の素晴らしい長久手市を築き上げてくださいました。住民自らが、将来を見据え、自分自身の土地を提供して、まちづくりを行ってきました。

本市には、市民がまちをつくる力が備わっているのです。

私がこの話をすると、「それは昔のことで、今とは関係ない」という感想を持たれる方もいらっしゃいます。

本当に昔のことは、今とは関係ないのでしょうか。

「LIFE SHIFT（ライフ シフト）100年時代の人生戦略」（リンダ・グラットン著／アンドリュー・スコット著／池村千秋訳／東洋経済新報社）では、「2007年に日本で生まれた子どもの半分は、107歳まで生きると予想される」と記述されています。

そうであるならば、私たち大人は、子どもや孫のために、今だけでなく、2100年を見据える必要があると私は考えています。

2011年の東日本大震災のとき、日本中が、お金や物は簡単になくなってしまふことに気付きました。「つながり」「絆」こそが大切だと痛感しました。

今の私たちが、次世代の長久手に残すべきものは、お金や物ではなく、「あいさつ」や、そこから生まれる「つながり」ではないでしょうか。

今、「面倒だ」「わずらわしい」と思って、あいさつすることや、ご近所づきあいを避けていては、次世代が、互いに支え合うことができず、苦しむことになります。

先人が苦勞して、貧困から脱出しようとした昔があるから、今の住み良い長久手があります。私たちの今があるから、未来があります。次世代の人達に、「先人が苦勞してくれたおかげで、つながりがあって、安心して暮らせる長久手がある」と言ってもらえるようにしていく責任が私たちにはあるのです。

～市長の話を聞いて～

次期総合計画の話し合いの中で、私の入ったグループでは、「24時間営業が始まったころから、隣近所に味噌やしょう油を借りに行かなくなって、近所づきあいがなくなった。いっそ24時間営業を止めてはどうか」「年始3日間は、店舗はすべて休業して、従業員が家族団欒できるようになるといい」という意見が出ました。違うグループでは、「スーパーで野菜を売ることは止めて、おすそ分け文化を復活させれば、地域のつながりも復活する」という意見が出ていました。私も同意見で、便利で快適だけが、「必ずしも良い」と思っていない人が大勢いることに驚きました。

こうした話し合いを、もっともっと多くの方とできれば、もしかしたら、暮らし方も少しずつ変わっていくかもしれないと感じました。